

コロナ禍から感じた思い、この一年

助産院マタニティ・アイ 成瀬恵
(イルファー釧路副代表)

コロナが世の中に出回り始めて1年が経ちました。原発事故の後もこう思いましたが「コロナが(原発事故が)なかった時代には戻れないだろうな」。ではどうするか?仕方がない、受け入れていくしかない。私は助産所の助産師として、小さいのち、新しいのちと日々向き合っています。なかった時代には戻れないとして、発想の転換・前を向いていくことについて考えてみたいと思いました。

1年前、市場からマスクがなくなりました。アルコールもなくなりました。助産院にケアに来られる利用者さんも当然減りました。そんな時一人のスタッフが「マスク作りましょう。時間はある、私たちにできることをやりましょう。みんなで作って、材料費くらいになればいい」。そのアイデアのもと、布を買い、ゴムを買い、ミシンを持ち寄って、得意な作業の役割分担をして、400枚余を作りました。途中、材料も品薄になった時も、九州の友人からマスクゴムを送ってもらい、ひたすら作り続けました。アルコールも、当院で生まれた子のお父さんが取扱業者さんで、ほとんど困ることがないほど入荷し続けました。このマスク、アルコールを、妊婦さん・産後のママのみならず多くの方が買いに来られました。透析患者さんの繋がり、年配の方や、ピアノの先生、保育園の先生、健康に不安を抱える方など。買いに来られると、一言二言会話が始まります。そこから、人の繋がりもぐっと増えました。

気がつくと、予想以上の売り上げになっていました。スタッフがその売り上げを、「子どものおもちゃを買いましょう。家では遊べない、買えないおもちゃを選びませんか」と。助産院のホールを大人が寛ぐ空間から、広いワンフロアの子どもの遊び場へと環境整備をしました。木製の滑り台や、トランポリンを設置し、抗菌・抗ウイルス材の壁紙や床材に変えました。コロナ禍で公園遊具も一時期使用禁止、子育て支援センターをはじめ、親子で出

かけられる場所もない。そんな中「100%大丈夫です」とは言えないながらも、人数、時間を制限しながらですが、次々と親子さんが集まる場所になりました。

子どもを遊ばせながら、不安・孤立感、夫の在宅ワークに対するそれぞれの思い(不満)、心身の不調、育児不安、お産に対する不安、子どもの発達、ストレス、SNSにより調べれば調べるだけ心配になる情報過多に対する思いなど。今まで耳にすることがなかったような思いにもたくさん触れる機会になりました。

外出自粛で、気持ちを発散させられない妊産婦さんもいることがわかったため、次にスタッフで手分けをして、過去1年間の約200人の利用者さんへ片っぱしから電話をかけました。「久しぶりに、大人と話をした気がする」「声をあげて笑ったの久しぶり」「誰かが自分のことを気にかけてくれていたと思っただけで嬉しかった」「今は行けないけど、時期を見て遊びに行きたい」などの声が聞かれ、泣いているお母さんもいました。

私は医師ではないので、治療も投薬もできません。ですが、お母さん方の気持ちに寄り添い、傾聴することはできます。「何をやるわけでもないけど、そばにいるよ」ということが持つ大きな意味を、私たち支援者は持ち続けていかなければと感じています。まだまだこの落ち着かない環境は続くでしょう。でも前を向いて、支えて支え合っ



エイズ、コロナ、がん…“命”考

田村 隆明
(イルファー釧路)

エイズ、コロナ、がん…。

大変な病気は数えきれない。しかしこのコロナについては地域、年齢を問わず多くの人たちがいやがおうでも影響を受け、「人間の基本」を考えさせられることとなった。人間の基本とは、不安や恐怖、希望そして喜び、ひいては生きる活力や人の生死、死生観など幅広い。

ここで気付いたのは、エイズやがんなどの病気の場合、身近な人、あるいは自分自身に降りかかると「自分事」として考える一方、そうでなければなかなか「他人事」でしか捉えられない。ところが、コロナは比較的私たちに当事者意識を持って考えさせる。

何故なのか?おそらく、これほどまでに生活様式を大きく変え、あまりに多くの人たちに影響を与えているからだろう。加えてSARS-CoV-2(原因ウイルス)、COVID-19(疾患名)が世に現れてからあまりに短期間で急激に世界に広まり、未だそれが現在進行形であるからだろう。ただ、「よく分からない」という言い方をする人の中には、そこに本能的に不安や恐怖を抱き、その感情を正しく処理できない場合に偏見や差別、時に攻撃性を発揮することもあり注意が必要だ。

冷静に考えてみると、何も良くないコロナ問題から学んだものがあるとすれば、それは自分事として「人間の基本」を考える機

会を得たことだ。そう思えたきっかけは、イルファーの講演会で学んで得たことや自身日常生活の中でエイズやがんといった疾患に向き合うことで不安や恐怖、希望や挫折といったものを受容し、そして諦観や寛容といった心境にあるからかもしれない。病気であろうがなかろうが、またコロナがあろうがなかろうが、自身の中の不安や恐れと折り合いをつけ粛々と過ごすことができるのなら、細い足で踏ん張りつつまだこの先も生きられる気がする。

ただし、現実と向き合うことはたやすくはない。支え、支えられる信頼関係があってこそその話。それさえあれば、また今日も一日、頑張れるのかもしれない。



コロナ禍におけるHIV/AIDS事情

宮城島拓人
(イルファー釧路代表)

昨年からの新型コロナウイルスのパンデミックな広がりが、さまざまなところに影響を及ぼしていますが、私たちがフィールドワークとしているHIV/AIDSの領域ではどのようなことが起こっているのでしょうか。

一番大きな問題は、HIVの拾い上げへの影響です。日本におけるHIV/AIDSの年間報告件数は、2013年の1600人をピークに緩やかな減少傾向にあります。2020年はその傾向がもっとも顕著になっています。北海道でも2019年は39人であったのが2020年には22人とほぼ半減しているのです。すぐいいことのように思われますが、これこそコロナの影響にほかなりません。コロナ、コロナで、HIVの検査どころではないのです。それは検査を提供する側も検査を受ける側にも同様に当てはまります。

匿名無料でHIV検査を提供している保健所が、今どうなっているか、みなさん想像つきますよね。そうなのです。新型コロナウイルス感染者の検査・把握と濃厚接触者の調査、入院調整で手一杯の上に、ワクチン接種の対策にまで駆り出される始末。HIV検査を中断している保健所が後を絶たないのが現状なのです。そしてHIVの感染不安を抱えている人にとっても、保健所で

の検査が出来ないからというだけの理由ではなく、このコロナのご時世に検査に繋がる行動がとりにくい状況になっています。そして最も危惧していた献血でのHIV陽性者の増加が現実になりました。2020年上半期の献血件数でのHIV陽性率は献血10万件あたり1.049件と前年同期の0.799を大幅に上回っているのです。検査をする機会が失われたHIV感染不安者が、こっそりと献血検査を受ける人もいれば、検査機会がないために、まったくHIV感染を意識しないまま献血行動に至る人の二つのタイプが考えられますが、いずれにしても由々しき問題です。

検査でHIVを拾い上げられない人が増えるということは、数年たって突然エイズを発症し受診する人(いきなりエイズ)が増えることを意味し、実際2020年上半期ではこの数年間減少していたいきなりエイズ割合が突然跳ね上がっているのです。人流の制限やステイホームの推奨によりHIVの感染機会が減っているというわけでもないと思います。にもかかわらずHIVの検査機会が失われているということは、今後エイズとして初めて報告される感染者がさらに増えてくる可能性があり、私たちは地道に我慢強く予防啓発運動を続けていかなければならないと改めて思います。